羈旅湯錄

下之卷

ル 4
3495
3

門ル3
號3125
卷3

門ル4
號3495
卷3

昭和九年
十月八日
購求

參稿榮

契冲字ハ空忠姓ハ下川氏又名ハ元全善兵衛と称ス、摂州尼崎城主青山幸利ホ仕ホ寛永庚辰契冲尼崎ヨ生ル元禄十四年正月寂ス年六十二年山紀聞巻尾ヨ契冲行実あり貞柳ハ大坂の人油煙齋と号ス八幡山の信海の門人ニテ俳諧狂歌ホ

蓑笠漁隱遺稿　　坦庵居士正幹校

(九十九)契冲阿奢梨墓誌

契冲師の墓ヲ。大坂飼さ〜町圓珠庵ホたり。碑面ヨ圓珠庵契冲阿奢梨之墓とのみたりく。年月畧傳等ホ〜。傍らホ碑あり〜〜。是ヲ後ヨ水戸の安藤爲章の建〜所ホり。傳記大〜〜年山紀聞ホ志〜〜〜ホ呼ホ仝〜。故ヨりて〜来ちぞ

(百)家隆卿の碑　附貞柳碑の噂

家隆卿の碑ヲ。大阪新清水のうらうら。田の畔ホ〜高き所ヨ松あり。その下ヨあり近年安井の門主建たまホ所ホり同所新清水の下ヨ。鯛屋貞柳の碑ホ。これも二十五回忌のこと紀門人のたて〜ものなり。つまも後人の作ホ名めづら〜〜ホらぞ

名高し享保十九八月十五日没せ年八十一

出雲守忠朝ハ忠勝が二男あり元和元年大坂夏陣ゑ従者二十余人と天王寺口ふ向ひ〻戦死せ年三十四

紹鷗ハ堺の人姓源氏武田信光の後あり、たねま きそ同し武田の末あれバなりとそ今ハ野とありふ

ゑりそうつ〻あらぎそ

(百一) 元和戦死の古墳

七月晦日生玉明神。高津の社ゑ詣せ。夫より一心寺ふいそり。本多忠朝朝臣の墓ふ詣せ。墓の三方ゑ従者討死のの十三四輩の墓あり。外を板ゑ〻構ひ〻猥ふ人を入まぞ。この寺ゑ元和討死の石塔あそ〻あり。茶臼山の御陣跡。一心寺のうそそらふあり。小松ゑひあげまそり。

(百二) 紹鷗が墓 附千家の墓の噂

泉州堺。南周寺ふ紹鷗の墓あり。鑰代百銭を寺僧ふ與ふまぞ則墓ふ詣せ〻む。詣人墓前ゑむ〻バ。土中ゑのづ〻ら茶とたろる聲ありとつふ。是を墓の後ふ四ある呼あり〻。そまく自然と風の吹入る〻あり。これ寺ゑ利休をそ〻め千家代々の墓あり。

ゑ〻ふと詠じ自ら氏を武野と改む禅ふ参し和歌を好み茶を嗜む一閑居士と号せ永禄元年五十三あそ没せ茶道を利休ゑ傳ふと云

(百三) 鬼貫が傳 附評 此條蓑笠雨談ゑ載されバ省く

(百四) 大坂市中の總評

大坂を眉毛なき女も。髪を多く嶋田ゑり。又嶋田ゑ髪ぎるる けを。〻〻髷両ゑげあり〻つ山をすれあり。髪の圖前ふえ〻〻〻

○大坂の市中茶店あり。渇せる人を途中茶ゑこゑ〻〻ゑり。夜行せるふいこふぐ紀茶店ゑ紀ゆゑ。格別草臥るふり。川筋ハ舩を岸ゑ繋ぎなき。ゑ〻ふ〻酒肴を鬻ぐ。京の河原の涼ゑを かとそり。夜店ハ大〻と提灯を出せ。京をつけ行燈あり

○七月廿八日。大坂御城の大手先を徘徊し。天滿天神ふ詣せ。近日の大水ゑ天滿橋天神ぞ〻落く。難波橋より往来

○同日坐摩の社ゑ詣せ。社地ゑ〻せ物芝居茶店等あり。

○天王寺を大門のこ孫り〻。一圓焼土のこ残まり。天王寺の傍

新清水より。遠く西海を眺望せまゝば。左に かつらき山。金剛山。二丈ゞ嶽。むらゝゝ ふゝ聳。淡路島山そゝろ ふゝゆるなり。

○男子の髪の風を。ゑびゝゝり髷多ゝ。圖を前に ゑえそろり羽織を京よりも短ゝ。

○新町橋の大サハ。江戸のおやぢ橋ゞどもの ゞゝ。おぢ橋の上。半分を商人ふゝ或を房藥をうるゑせ。或を煮つけ肴水菓子のたゞひをうるもの。おの〳〵やたゝゑせを出ゝ。橋の上を真半分ふゝて。一ッを商人のやゝゝふゝ。ふさげ。往來甚ゞ混雑もきども。高言をつゝふゝもなく口論もあゝ。大坂の市人つゝふゝ風炉ふ釜ふどゝけ或を箒ふどゝふきて。万事高上ゝゑもるこゝろの地の一風ふり

○順慶町の夜見世こゝをめきもるゝざあゝと。暮より四ッ時まで八十町餘兩側こゝな商人ふり。故にこゝひわゝを夜出る人多ゝ。

○京も大坂も夜ゝを。延の上に古き手道具もゞゝゝゝの古器ふを出ゝ。ちゝきゝ行燈を横ふゝて。前へゝゝむけ火を點を。夜中ふこのゝるゝゑせゝゝゝもあるゝど。喧嘩争論ふゝゆるゝふ。賊の愁もふゝきゝゝや。こゝもを夜ゝゑせゝゝゝ。京を大和橋辺夜ゝゑせ多ゝ

○新町の格子先ゝゝ古物ゝゑせをゝゝゞ。妓樓のゝゑせ先ゝゝ櫛ゝんざゝふどゝゝゝの商人出ゝゝ。江戸人ゝをめゞゝゝ。

○大坂を食物の外。店ゝゝゝふゝゝゝゝふ。故に商人の店ふゞ昏も障子をゝゝゝおゝ店多ゝ。ゝなおゝゝ商ひ多き故ふり。

○雪踏をゝるゝ社ハ穢多ふゝ。橋詰ゝふ祇店ふり。素人の店ふ雪踏ふゝ。皮のつゝざる女のゝゝ附草履と。下駄足駄をゝるゝゑせちふゝふあり。京も同ふ

○堂島の朝市。ゝゝ又勢ひふゝゝゝゝゝ。

○一体大坂をちまくせすく。俗地すく。うぶぎき不多。京の市中小木戸あり。大坂を一町〳〵小木戸ありて〳〵。木戸の柱うぶぎとうちつけ。是へ町名をかく〳〵わ。橋〳〵あも札ありてかたちの名をかく〳〵たり。橋小名をかくそこらいふ〳〵、木戸ハ町名をかくそこらに近ぐらのこゝありとらふ、

○大坂ふ〳〵ちくべき神社を。座摩。生玉。天満。高津。等ふり。天王と稲荷ハ不〳〵ふあり。稲荷も又神社ちこゝるべく〳〵ゆるゆ社多し。只天王寺と住よ〳〵のこ懐古の地ありそれも天王寺を去年の火災ハ礎のこ残まり

○大坂ふ〳〵よりの三ツ。飲水　鰻鱺　料理　良賈　海魚　石塔　わきもの三ツ

うるぎを小串のこふ〳〵。京の若狭うるぎよりとれり。大庄といふ店。鰻鱺をこゝるこおびゝ〳〵かゝ〳〵よ〳〵。今年ハありて店とちまひね。その外料理店數軒あれど江戸人の口ハいあそぐ。うのむ瀬も塩梅名をゞい高〳〵ぐ

○大坂の市中大猫もく〳〵わ。是を穢多主ある犬猫をつきゆき。皮を剥ゆ名ふり。犬子をうゆ一両月たちて穢多ちまとつきゆく。老犬を穢多とちりてこゝまくれば大ハ吼かゝまて。屠兒の手ハのらぐ。故ハ小犬のうちつまゆく〳〵。主ある犬を捕ハとゝゆくさぐ。京ハ大猫もくあゝまゞ大坂をいハく〳〵ぐし只夜行ハ犬糞のわそもふきのこ才一の好景なり。大坂の穢多村ハ江戸浅草の新町よりも大ちくり、ぶ作りいろまもてふうぐ。一方ハ一反ぐらるふ、狩くまとこゝふ穢多村交易の商船ふ〳〵〳〵

○大坂の人氣を。京都四分江戸六分ちり。儉ハすくふ〳〵京と学び。活ふ〳〵〳〵江戸ハふ〳〵。ちのまゞる實氣ハ〳〵京ハま

追書
盧橘が著述、度々書肆に損をさせたるもの、後まで絶て行きもぜず京にうつり住み、又大坂口縄坂へ賣ト世ーが文化辛未迄〳〵ありぬとぞ、

さるもの。一體人氣のよ〳〵一致もるところあり。あまい土地のせまれゆゑなるべし。

○大坂を今人物なし。兼葭堂一人のこ。もこの春古人となりぬ。玉山が畫を書肆の〳〵珍重〳〵。雅人をこれを惜れり又祖仙ハ猿の字生をよく〳〵。その外畫工あゞ〳〵らもあまたゞ京に及ぶ。盧橘（ろきつ）といふ人を。筆耕と戲作をして。家内五人を養ふ。是も第一耕に作者をもつて渡世よりも多人。大坂に盧橘壹人ありて。あれ人予逗留中大に深切ふ。もてなさる。戲作のこゝとめて妻子を養ふしと廣き江戸にさへなりもぶ。大坂を書肆の冨る地ありとらもすてもるべし。

○大坂を賣藥店多し。首より上の妙藥。腰より下の妙藥などいふ招牌（かんばん）を出しもそ世〳〵らもなり。

○大坂を時を太鼓ふくうつふ。あり。あすまりて夜の五ツ半頃ふうつなり。是を御城の大鼓を次第に隣〳〵ふうつ故。遠き町を次第に時がおくるもなり。新町を夜九ッよりうつ。是を大太鼓ふり。江戸吉原まてひけ四ッといふを。新町ゆへ太鼓まで。太鼓より後ゆ〳〵いふ。但し新町の九ッを世間の八ッなり。

○天王寺の地中に。催金文七が奉納の繪馬（八幡合戰の図）あるもの〳〵〳〵〳〵ふ。去年天王寺の燒失の時紛失して今もふ〳〵といふ。盧橘が話に。實ハ文七が奉納の繪馬まがらもの。名前別もの〳〵餘人の奉納せ〳〵もはあり〳〵といふ。

（百五）難波雀（なにはすゞめ）の抄書（ぬきがき）附西鶴名殘の友

難波雀　延寶七己未陽月下旬　吉備國水雲子著小本一冊　俳諧師所付の部

一　天滿碁盤屋町　西山梅花翁　一　鎗屋町　井原西鶴

歌學者の部は　一江戸堀　下河邊長流

又屋敷名代の部は　一細川越中守殿　名代　天野屋利兵衛

甚だ珍書ぶり。大坂にて見たり。予も名古屋にて。諸買物三合集覽とかの小本を得たり。元禄五年の版ありそのかもむ紀雞波雀は似たり

○西鶴没後。信友園水京師より來り。七年その庵を守る。西鶴名残の友（合本五冊）西鶴草稿のまゝ出板せ。その事園水が序文ふえ。俳諧師の傳をかの〳〵書たるものあり。田宮氏所藏り〳〵と予まおてる。

○長堀銅吹所づゝや所望郎席

又さらひらかわるゝの吹革もそなてふ冨貴と家傳つよ

（百六）住吉　附紫陽花屋の松小町茶屋

八月三日夜前より雨ふりけるが晴るゝやいなぬいぎや住よりへ詣んとて。書肆大野木氏やとて船を用意して（大坂にてやとて紅と称もとりの江戸のやとる）ぶねふ予といざなひ。心齋橋より乘出て。住吉の濱より見まゝば。武庫山右に遠く聳へ。淡路嶋もとまつの緑をかちもて。一の谷ありどもとふ見ゆ。岸の姫松を數百本千〻せの緑をかちもて。四社の御神上久〻尊く。社前のそり橋。角柱の石の鳥居。同石の舞臺。誕生石。その外攝社を巡拜せ。淺澤の杜若。車〻の櫻。そのかいなけもどそれ跡をたづね。御田の稲を青〻て。いまだ花をむすぶ。神宮寺奥の天神巻〻拜し畢く。酒樓伊丹屋に酒食をとゝのへ。

〻は中とかゝるゝみん紫陽花ゝ〻ぬ〻ぬ〻ぬ

夫より難波屋の松見よ申候。社より西の方三町ばかりふかり。茶店の庭木あり。つくり木なれども。四方二十軒ばかりもんまるふ笠の如く茂生す。木の高サ一丈といへども五六尺あるべし。ひきくくるめ。葉ふかりてい三尺。或を二尺余もあるもあり。あふくあぶき餅をうり。又松のくちを紙もちてうるもあり。

○ちやせんべいを。江戸まくいふまきせあり。かるやれの形あるたるのあり 此辺あるくやとのふるせもて。このせんべいと竹馬とをうる。本家なり。

○社前の西北の角よ。小町茶屋とのふあり。尋常の茶店あり。この茶店よこのぎり。長き柄杓のうつる茶碗をのせて茶をいれ。

小町茶屋酒がらくらもあり 松の花

帰路も船よりくもべ。天下茶屋へをゆのぞ。この日あつき陰ら

いとくて日くもぬ。あつきたびしく舟よのりなすがもふ沂もべ船おそく。左右の岸辺よ鈴むしのそびく聲くはあるがら。まつの色まくくし。又一佳興あり。前ざまを島くく伽やらふの船よあひぬ。お内衰色ふくと俗を称ぶを島とのふ伽やらふ舟まんぢうふり土地の人をぴんまんとのふ

その夜九ツごろ。船心齋橋よつきぬ。この日船中秋暑をうれ。いくく興ありくくをぬ。

百七 松明の施行

大坂をつゆか河水を飲水とする所をふ。近日近江の大水ゆ河水濁くく飲むもくつぞ。故よ大坂のもの今道村増井の清水。それ外天王寺辺の井戸の水を汲ふゆくもの。夕方より引もきくくば今道辺の人家の前よ。夜を大挑灯を出くく田の畔まい松明をとのくく。松中水を汲ものくく助をとほもづくく大坂ハ氣が

さるるふうて。まけどたすけひの商買等。大水みづ落こる小橋い。官府へねがふく。自身一個の入用まく。仮橋をうけ。無銭と書し挑灯ふど出しおくゆうのこと何ふまづ。人々きそひくおそこうあり。

百八 浪華妓院の噂

大坂の妓楼を。新町と。島の内。曾根崎。ようこうこうゑ。嶋の内をえゑせ付なし。新町ハえゑせ付あり。太夫天神をえゑせをすらぞ。鹿子位と稱するものいまふえゑせをする。天神あるえゑせ天神としてえゑせこそするものあるまで是ハ下品ふりえゑせの格子も兼未まく。間口三四間よりそだぞ。妓も十人よりい多うらぞ。えゑせをする妓いちひきれ蒲團を敷く居る。又きこ孫うけをして。居せんをうくえゑせるもあり。衣類ハ紹のゆゆうど多し。帯をひちりくんのきぐれなり。店先ハ老婆。或ハ子髪つき居て客の

澪標を大坂新町の細見記をり寛政十年再版せ

袖をひく。天神のあるえゑせい。天神えゑせとく別なり。

○凡揚屋の廣く奇麗なること大坂よりまくものなし。揚屋ハ九軒ハ限る。そは餘を茶屋と呼屋なり。こくこくふうこくれば まくふ畧せり。新町ハ三方ハ口あて堤未ゆきぬけなり

百九上 太夫天神のかゝ借り

太夫天神を夏ハ小袖ふり。帯を〔　〕如此横ふ長く結ぶなり。つまを右の方へまゆくこと巳こくなり。新町ハ太夫天神をかうくえゑるこうふてあり。京の島原又ハ祇園揚屋ハかふやもべ。客ある妓も必来る。太夫ハ引舟女郎のつれくこうもなり。天神ハい禿の十二三歳ぞうなるど。廣服のゆくふて。おの〳〵一人ハ一人ッ付そひ来る。客を席の正面ハ坐そ。末社を左右ハ列ち。叔赤前垂の仲居のあうきくたるもの一人。盃臺ハ盃をのせ。ゆくきの入口こう一二

間あるゝまゝ居る。又その向ふに一人硯と紙をかもちぶひろへ居る。是を太夫天神の名をもつるもの。さて太夫ふてもも天神まゝも。わの〳〵坐敷の障子の外に行む時。うゝ秃誰さんうゝと妓の名をよぶ。その時仲居かゝてわつもこゝつ。いづもて一間に時に太夫もと〳〵と立出。盃臺の前に立ち。墨つきあるうちちけの中程を。右の方帶の結目の下へくゝらゝ居りすぐら。左りの裾を折〳〵左り片方へ一尺ばかり寄くもちふすたる。うゝ時仲居うゝ盃臺を太夫の前につゝとわ〳〵つけ何座の誰さんと高聲によぶふ。その時太夫もとやうふ盃をとりあげ。客の方をうゝ。持たる盃をむつたりと盃の上におく。仲居その盃臺を一尺ばかりつと客の方へおし〳〵やり。又高聲に誰さんと妓の名をよび。臺をもとの所におく〳〵時。太夫つゝたちそうる。その所作ぶつ〳〵もなるものふり。何人みても所作る同じ。

天神もまたかゝのごゝ。但太夫と天神と一所すいかりぞ。天神をかゝ〳〵こうる時を天神ばかりなり。叔かりたる太夫一旦のゝらびゆゝ〳〵後。書留うる名前をうゝ。よぶべき太夫を名ざ〳〵てやれむ。客あるものい来らぞ。客なるもべ程なゝ〳〵来るなり。

○太夫天神を夏も小袖うちちけなり。繻子或を綾ふどの縫あるうちちけ二ツ三ツ出る。帶を金襴天鵞絨（びろうど）の〳〵差（しめ）あり。天神を江戸吉原の坐敷のちち位のもたるり。中すい縮緬の襠（ウチカケ）たるもあり。又顔色も一様にもをのらぞ。呼びむつ〳〵坐蒲に朱きべ。直に客のうゝろに坐そ。床に入るまで了（カムロ）鬟付そひ居て。或いあふぎ或をたぞゝをつけ。左右の用事を悉ふもの。江戸の妓を客のむふへもつまで

この里の妓を客のうゝろにもつるもの。あるもの席上にうゝ顔色をうるもうゝふ

うゝ。越後ちゝ。或をちりめんの草物ふど。夏の衣服ふ新にて卧

扨閨房に入まで。件の衣服を長

き。凡房中おごきく帯をおあく寝るこの。太夫と天神のこ。おど
きい浅黄ちりめんおんあり その餘伯人とつづく房中帯おく。賤妓を丸裸お
くを卧き。是衣服をいとふおきり。いと真さめておぶふ。

(百九) 伯人の評

嶋の内の伯人を。太夫をどおふをかくねど頗美おり。衣服をを
たやちぐみおどおり。繻半を着ど。帯ハ妓も歌妓も黒天鵞絨
が多く。大くこ京の祇園り似くり。

○嶋の内の伯人。道頓堀の茶屋おどふ来りて客と卧く。翌朝
ゆうふを。必むりひの駕来くこの駕よのりて帰る。是を朝開あい
寝起のまゆる客を人よりせくこと。びまるがるふのもこふ。
或を私窠(カクシバイオナ)おを公をもどかくこともいり。その道僅三四町の間を。
妓の駕ふのりくゆるくと又めづらく。京まてもかくこおり。

○道頓堀の茶屋ハも高卑ありく。大楼へハ嶋の内の妓もよび。
小楼へを坂町の妓をよぶおり。但く小楼へを島の内の妓を呼
まねくこふふいあらねど大くこかかくおどく。是客の尊卑ふ
よる故ずや。

(百十) 俳優作術(ゲジ)

大坂おていい役者もげハ子おゆまを抱おれ。こまを他の茶屋ハ
預けおれ。その花を得く活計とするもの多く。兵太郎おどい
ふ役者を。こくこのとつふ妓をかくへおれ。坂町へ出くおく。おを
るくのを兵太郎が抱の冨野と名ざくてやくこど。是芝居と妓楼
と軒をおらべ居る故おくづく

(百十一) 難波(ナンバ)新地

難波新地を。左右六筋の街(チマタ)悉妓楼おり。数百軒おのづく。夜

をこのけ行燈を斬ふ出し。甚ざふきそく。大うと京の二條新地
る似もり。いづまつる賤妓なり。

百十一 難波堀江 附堀江さし紙

難波ゆり江の妓樓を。坂町ゆ似く新地ゆをわとれり。坂町ゆいえ
さし紙を。いづまつる京の祇園のごと。但圏點山ごとい紙

堀江さし紙

今もさし紙出ル

新造後帯 二ぎ 一ぎ

よ新 連

せんこう一本を六ゆと定め、四本ゆちて花一ッ或四ゆ六、これを一座とゆふ、四ッとゆ
り、花ごゆりと、花のさだめあり彩色ゆあるゆ妓をさだめの外せんこう一本半よりい
あゆひをまゆ本ゆり、ゆあゆふ一本附とゆふ、又時妓い一座切の客ゆい出ゆ、ゆゆ
ゆ二度ゆゆもるゆり、うどのよ新造ゆふ妓ゆ出ゆ、ゆゆ
ゆり、新造ゆふ年少ゆ妓ゆらゆ、ゆゆ新造ゆふ妓ゆちゆせゆいゆせゆり、下い妓の名
その地ゆいつゆを、ゆゆ新造ゆいふ

今もさし紙出ル

新造前帯 ゆ新 ゆとめ

○新町を一ゆう引。揚屋をゆゆ一挺を為ゆ。その餘を二
ゆう引をり。大うと京ゆ為ゆ。

○嶋の内。曾根崎。難波堀江。難波新地。坂町。せゆゆん。尼寺。等か
の〳〵高下ゆ為ゆ。ゆゆ大うと為ゆ。但〳〵新町の外を
ゆふ私窠ゆり。

百十二 大坂妓院の方言

妓の言語を。京ゆ大坂ゆ大同小異ゆり。大坂を言語を〳〵京
ようきゆ。ぞうとゆ京ゆ方ゆり。ゆふとゆ。ゆうこうとゆ
を京をどんつゆ。「茶〳〵」ゆ。わでゆ〳〵おきゆた。「ちゆ〳〵」ゆ。
「客のゆる叶ふ。妓ようわ〳〵ゆ。おきゆた。「ちゆ〳〵」ゆ。
ゆり。又江戸ゆ。「武左」ゆふを。大坂ゆ「ちゆ」ゆふ。「廓の牽頭」
を判官ゆふ。暑〳〵「ぐゆん」ゆ。「かゆ場所の牽頭」ゆ。

辯慶とうつ。「女のかくよう情をよせ〳〵男をひき。おき紙とと
うつ。「きづを。ろ〳〵じこいつ。「あふいちと。あふ〳〵ちとうつ。「人の妻
を。ぐつきんとうつ。この外いつ〳〵もたゞ〳〵。大こと京よ似る言語
あり〳〵。

百十四 女子の評

京も大坂も女を九顔多〳〵。京を瘦こちあく。大坂を少〳〵骨
ぶとなり。顔色の美惡よりてこん。京まさまり。

百十五 堀江の藝子

あり江い元げい子のよりとつ。今をきり〳〵。三絃箱の
かゝちその外大こと京のごと〳〵。但大坂よりこんろぬりの三絃
箱もあり。堀江のげい子。三絃箱のうらふ歌をゝてゝいひられば
きゝ〳〵ふぶつせるひ〳〵やこゝねのいく〳〵おもしろ

百十六 妓樓混雜劇

大坂ま〳〵芝居と妓樓と打混じたる所を。道頓堀と。難波堀江
と。北の新地あり。この内道頓堀むあぎりつり。

百十七 浪速のえりやを

大坂ふ〳〵歌妓ふじ。もつぷらうこふうこそめりやをとつ。京よ
てもうこをとうこうじど大坂よ及ぶ。節を江戸の河東よ琴歌を
ゆじへるようあるもけあ〳〵。煩手よいのらぶ節甚ざゆうやか
ふり。秋雨秋雨のをう〳〵もはれはるまのろをふる萩の花をくうう
あいの大こうこれてふまあ〳〵。章も雅ふり。折〳〵新めりやをのひろ
めあり。尾州三州よりいこもと大坂こうこと移を。又三十一のじの者
ふ。若をつくうこかこも。なりぶべく一篇あ〳〵ぶるこのをもうこ
とつふ。又別よさまこばうこあり見ハ曲も所よなり。ちこもども江戸

のさつきうを似ぞ。

百七 幇間 京も大坂も幇間を。一席をつふ堪ぞるものあり。幇間ハ羽織を着ぞ。嶋の内ハ幇間ゑ。音八とつふりのありこもい狂文發句ゑ。どゑ〳〵ぞ紀るあり。又新町ゑ赤助といふ幇間あり。画をよく〳〵。その外を無藝大食。甚ざのやゑるこのあり。京の宰ハ四条河原ゑ細もとりゑく客を引〳〵ぞ。かくせぎれバ〳〵〳〵宰ハ河原のあるゑ〳〵とのふ宰ハ河原ぞうあり。祇園ハべ〳〵〳〵宰ハもちゑ〳〵宰ハもとぞまる男げ〳〵やとのゑ紀あり〳〵宰巻〳〵幇間あり。

百八 首信が傳

大坂嶋の内ゑ信とのふ藝子あり。人渾名して首のぶとのふ。ふとゑ〳〵ふ。紀色絶麗。その首艶美ゑ以ゑ名。今婦人の品定ふ首がよゑ首がゑるゑとのふ。この紀ぶとりもとぞゑもとりとぞ。行年四拾餘歳。大坂角柳の活ふのぶ京ゑ十一己年ゑ〳〵ゑれ、去ゑのもとぞも猶今享和二壬戌ふ〳〵ゑて、四十二年ゑ〳〵ゑ、二十五六歳ゑ〳〵ゑ。實ゑ人妖ゑ。それ朝開ふ。紅粉をはぞふさぞる顔色却て美ゑ。父ハ御呼櫻長兵衛といひ一角力とふ〳〵。後角力年寄ゑなもり。のぶ安永のもとゑめげん子とふて京祇園ふあり。全盛類ゑ〳〵。豪富の人〳〵もぞ為ゑ金銭を投ゑ〳〵と夥〳〵。〳〵ふ豪富三井氏〳〵ゑ〳〵ふのぶゑ勉怒〳〵。數万金を費せり。世ゑいのぶふ十万両の金を費せ〳〵〳〵ふ、〳〵ふ於〳〵。三井の親戚及主管等大ゑ驚紀。忽主人を伊勢松坂の店ふ蟄居せ〳〵め。年中の雜費僅百金を限り〳〵ゑもを合力〳〵。親戚悉義絶ぞ。この時のぶハ京ゑとぞゑるべ〳〵〳〵を。自ゑりつら〳〵。ゑゑ日を樂を共ふ〳〵。その窮ぞゑるふゑ〳〵。離別せんい義ゑ〳〵ゑらぞと。強て松坂ふ至り。情郎ゑ給仕ぞゑ〳〵と十三年ゑり。のぶゑ〳〵つゑ人。且まつ

坂よりの間。本居の弟子ども少。まと機織ることを學び得ゝり。或日主管等商議して。密ふのぶふ之ら〻。そゝ〻ぬ實情十三年の苦勞。餘の婦人の及ぶ所ならぬ。志かもども其許のゝふ所らん限りい。諸親の憤り解ケぞ。主人ふゝ〻び世をひろ〻もることなりともぞ。志ゝもども主人はそこの深情よひろもぞ。寵おゝろ〻ふるれ日なゝもび。ゝづゝのら放ちやるゝゝのゝゝび。のゝ主君をおもふ実情あらば。ゝづゝのゝ請ふて京にゆもゝゝふ。のぶ主君の爲よ敢て爭はぞ。遂ふ京よゆらんゝゝを請ふ。諸親容ゝまゝゝび。種々の手道具等をなゝゝ。路費を用意して京よかゝらゝむ。のぶ京よゆりて手道具を賣り拂ひ。七十餘金を以ゝ櫛笄等をゝゝの〻。別よ衣服を製しゝ。ふゝゝび。祇園ふ出ゝ歌妓をあゝふ。全盛むゝふすさゝり。

そのゝち俳優嵐雛助。後嵐小六と改むゝ又ゝ嵐雛助が文ゝり、容よのぶふ通ゝゝ情好む厚し。世上評判只ゝの一事よりゝふ角力より五七輩御呼櫻ゝ弟子ゝり商議しゝ。御呼櫻ゝ家よ到りゝゝつらゝ。ほのゝふきゝ師の女雛助ゝ妾ゝすまゝと。師いゝなまび女を俳優の妾とふし。利欲の爲よ身をけゝさゝめのふぞ。ゝ如此あらば吾儕師弟の約をかゝもべしゝゝふ。御所櫻ゝをゝゝ大よ迷惑し。ゝのゝをのぶよかゝりゝ離別せまゝふ。のぶ又これを雛助よ告ゝ。雛助云。角力と俳優と尊卑何程ゝおゝれる。渠ゝゝゝら浪人をたゝるものとゝゝ。元祖をゝて人のゝものゝなるふいゝゝて共よおそゝ。又俳優もむゝしい禁裏ゝめされ。公儀の上覽をへゝるゝゝあもび。由緒を論ぜるふいたりて更よ高下ふし。吾も又身ふゝゝものぶをゝゝまゝふゝよ於て

爭論止ぞのぶわもつら〳〵。究竟家父角力中よあもびこそか〳〵るよ〳〵ぬこも出来ぬ。殊よ父年老こり。隱居せ〜えんふい
こそ。京ふ〳〵志このるべき家をのこめ。ゆたゝふ老を嘗ち〜む。爰
るかゆを御所櫻角力を辭して隱居ち。よつ〳〵のらをひ形よ解
ぬ。そ其後雜助病死〜そ。のぶ寡(ヤモメ)となもろ。歌妓をなもこ〜元
のごと〜。程ふ〳〵俳優文七(記男)ふわもこも。遂よ文七ゞ妻〜なる。
い〳〵程ふ〳〵文七病よかり〳〵危〳〵治療ちゝ〜ふ。のぶ夫の爲ふ
立願〜そ。こゞのら髮をきり〜て讃岐國金毘羅ゐ參詣ち。のぶ
いまゞゆ〳〵ぞ。文七家ふ病死ち。(ゞもバ必金と落ち)是より後のぶ又ふ〳〵び嫁せぞ。大坂島の内ふ出く歌
妓をふち。今ふ全盛ふり。のぶち〜和ゆをもこ。又俳諧の連
ゆを嗜めり。予大坂よ遊び〜日。一夕道頓堀の竹亭よのぶと

會ち。のぶ來り〳〵席ふ着と。そのまゝ予ゞ名を呼ゝ言語旧知の
如〜。餘の哥妓幇間等先ゐ來もるものも。ゆまゞ予と志らざ
るもゆ。のぶ問ちぞ〜そちやゝ〜その名を知るあやゝむ
べ〜。席上の嫖客のぶふ發句をのこむ。のぶ再三辭〜て後
ゆらももて〜ゆをひさ志やまり〳〵ゐ　のぶ
かゝ志ゝめて出〜ぬ。ち深ゆ又拙うらぞ。のぶ予よ扇面を請
ふ〜といと深切ちり。則狂文一篇と狂歌一首を志ゝ〜てゝ〜せ
ぬ。諸客與よ入ゝ。席中の妻妓幇間ゐふ即興の發句を作る。
又予ふ文をこひ歌を清ふ〜のゝ〜。四更ゝ〜そ〜めてやむ。

もゝ〜ゝのわゝやゆ〜紀女ゆ花　(宇敬)ふさ
はちまへ鶯年一のゆぬち千ゝの秋　(司)志け
一ふ〜ふ出のゝ志ゝんと志ゝふけふゝる　(牽近)音八

この外席上の漂客。雨窓。國瑞。盧橘等即興の發句あり略そ。

百九 吾雀が噂 附幇間亦助が噂

大坂新町もゆうたん町の茶屋。松雄屋伊右エ門い。吾雀と号し俳諧をこゝそり。手迹も又拙うらぞ。元トい医家の子なて後よ幇間をあゝひるぶ。近ごろ[illegible]吾雀妓院中の人よ似ぞ。至極見識あるものあり。予一夕盧橘よ[illegible]吾雀を訪ふ。主人大よろこび〳〵書疎の欲をふもそ。予ふ歌をこひるもべ。

なめとりの[illegible]

又同所よ亦助といふ牽頭あり。元トを加賀の人ふゝ。この亦助亦助席上よ筆をとる筆意あぐ妙あり。予よ賛をこふ。吾雀も又こゝもふ賛そ。この亦助至極柔和ふして。幇間のどく[illegible]。こづゝら足齋衛之と號そ。但文事をなす紀人とゝ。亦助こづゝら新町橋のゝふ俠者(ラトコヤ)のたぐ[illegible]と居るかさを画く。予ふ讃をこひゝもべ。

ちよとそこへ掛結まで[illegible]出入の秋の月鈴
芋の画よ　蒼〳〵めていたゝわ[illegible]玉や皿の芋
なすの画よ　おもゝ[illegible]ゝ[illegible]　吾雀
牛蒡の画よ　化ものゝ[illegible]　仝
大坂の妓院中。この者二人と。南の[illegible]。音八のゝ。少〳〵風流あり〳〵こゝ。京ゝ[illegible]ゝ徒よ風流あゝ[illegible]

百十 總嫁

總嫁そ。今一道村の田のゝゝよ出るのゝ。紅粉をわゞこゝさぞ。さ

あづら素人のごとくしゆ。づまも醜婦なり。まゝもどる病疲の者あをひからぞ。又西横堀の材木のうげふ出るものい。いづまもよそをるひ〳〵美なるものあり。〳〵六三がうびまーふ。うち材木のあるふなりとある夜夜行のうりふ。友人指きーをかもまり。

大坂の遊廓いふ屋和一大うさ江戸のごと

(百廿一) とぢやらふ

大坂まゝ舟まんぢうを伽やらふとつふ。土地の俗とぴん志よとよびあせり。毎夜船を前ざま嶋その外元船のかゝを居るかうふあぎあり。伽やらふとよぶふり。則元船へよび入まを船頭のあそびのとなりとぞとぎやらふとを閨の伽をやるべーとりふの義なり。元船の舟人ゝまをよび入まゝゝる時。この志ぴん志よ立膝をー。前をかゝいふーて客ふゝせーむ。そその陰中

瘡毒あれを志めゝ志意ありとつふ。予これを聞く暫時噴飯せ。

(百廿二) 妾奉公人引札の噂

大坂ふゝ先年。めりけまゝ公人の引札をせーゝ志ありと呼ーー故。ゝまを大坂の人よたづぬゝまよ。そ志御官より御志のまを請て。そ志ーとやゝぬ。ゝづゝ志留ゝまゝび。今をその引札をのちたるものゝまふゝーとゝつ。ゝふ志りのを後よゝまゝび。何とゝうゝ志ものあり。

(百廿三) 京大坂商家の評

京も大坂も。妓楼の夜具を甚麁末なり。太夫天神伯人といへども。郡内縞の蒲團一ッふ過ぎざる。是夜具をゝふその茶屋より出を故なり。伊勢古市辺もとかくの如し大坂を京やど遊歴の旅客ふ。ゝまを街頭悉妓楼まゝ。又悉繁昌を。大坂を一體金銀ものゝよ志

地あり。商家の小厮（こもの）といへども。自分のまたらぬを以て商ひの利を得ることあり。畳を業用よりまだんなく寸暇あることもあり。おい五ッより後。商家の主従ともに徒然なり。ゆゑに一日も辛労を忘れんためなり。妓楼に至りて酒ばかり遊べり。商家の奉公人も。自分一個の商ひにて得たる所の金銭を費し。敢て主人の財をつかはるるにあらざるべし。主人も強くこれをいましめず。ゆゑに妓楼おのづから繁昌あり。京を去りて吳服物など商ふものもしばしば女なり。これを牙婆（スガイ）といふ。この牙婆反物をせおひて旅館に来り商ひをなす。女子を反物をとり扱ふ。手先和らかにして反物損ぜざること多し。言語巧みにして。價を論ずるに至りても一個の才覚あり。萬事主人の意をうけ〻これをうる故。却て客の買ふべからざるものをも賣ることあり。又金銀をとり扱ふ人もまた

私をなす。男子を出商ひをなすこの必ず私多し。是を十字路街頭恣妓楼あるゆゑなり。こゝをもて出商ひをなすの徒い悉く女子なり。京と大坂の商家。こゝろを用ゆる徒才覚。大小なるおとかゝる如し

百四 道頓堀（どうとんぼり）の芝居

大坂の洪水後あり。芝居いまだ出来ず。道頓堀の大芝居を間口京の芝居よりもひろし。その中芝居ありのごとし。大芝居のごとし。あやつりと中芝居の興行せり。八月初旬ふいごろ。道頓堀角の芝居に看板あり。浅尾為十郎。藤川八蔵。大谷友右エ門。中山一徳。友吉あどゝゝなり。八月十五日ころ初日なるべし。

○道頓堀の芝居みてい。江戸にて川ゝと称するものゝ茶や

の下女あり。見物の人とうれいに走りよりて。コレ〳〵幕をうさんせんといふく袖をひく。

○もべく上方の芝居を。幕の間の太鼓ハ半鐘をまぜくらいあり。口上のひを幕際より三尺ばかり外。花道へ出て役割をよみ上ル。尤ものろくゆるく。口上をよりても幕いたぞらく明ケば。うれる大ハ拍子ぬけ〳〵たるものなり。

○大坂をよけく桟敷の高料なる呼ハく。たのたり芝居ハ至りてハ増しとなりたり。たとへば二貫二百文の桟敷へ四貫文の増をとけく。都合六貫二百文とる。京ハも増しあるもども大坂程ハ高〳〵なり。その餘を京も大坂もかたらまことれ〳〵。妓と雜劇と食物ハ。江戸ハ下直なり。

○大坂の中芝居の役者ハ限りて。返詞をするハイ〳〵とのふ。

ハ素人すてもハイ〳〵と返詞をするものを。小芝居出とのふく笑ふなり。

○遊女の短尺もべく〳〵の書物ハ。紋所の印をおすこと尊子八千代もく〳〵めくらわをかせ〳〵よ。箕山ハ大鏡ハ見ゆ。

百廿五 伏見の夜泊

八月五日七ッ時ちろ大坂を出ぬ。船すく伏見へ登る。今日浪花の友人盧橘、國瑞、薺坊、さく山和尚、雨窓、蜀人、大野木等、送行の盃をのかむ。今夜風雨淀ハく

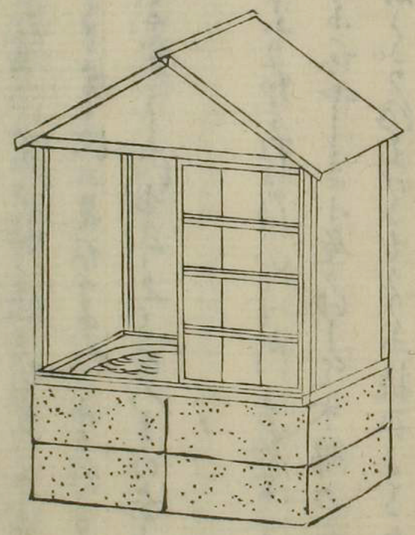
あるるるむもとのれあるん蓑のうよふりそく雨の降ハ久るる

六日船ハ淀ハ舟ハ伏見ハ着きぬ。今朝ハもく大風雨。六月の洪水ハうして大津へ出ぬ。直ハ京ハ向ひく晴をまつ。八日ハ京を立く水口ハ泊る。今日大津邊所々洪水の跡をうく駭然たり。

○八月六日の大風雨ゐ伏見より大坂の間又々出水。近日築直せ
し堤をおし流し八軒屋邊六月廿九日の水より高きこと一
倍もまさるなり。この日大阪の小橋三ツもかりあるもなり。
ゐ五日ゐ大坂をたちける右路次の愁をし。此節石藥師庄野の
間まれ〳〵大水。もし落ち五七日往來あし。予ら南より伊勢街
道を行く。九日の夜津ゐ泊る。津ゐ兵丹屋とゐふ旅宿あり。參宮
の旅人津ゐとまるものいかあるもこれ兵丹屋ゐ來るゆゑゐ
甚ぞ繁昌せり。

百廿六 伊勢路の居風爐 是より伊勢及ゐ紙の活をあるそ

伊勢路の居風爐を大りこと戸棚あり。そのうちに圖のごとし。上ゐ
ふぐさゐ〳〵て箱の如きもあり。



ゐふろのうちゐ
柄のうちにひ
ゐ〳〵あり。これ
ゐくかゝへ中を
かけるものあり、尾
州三州あたりの
人いこれを婦ゐ
見て人の入れゐ
似たるものゐ俗忌
あり

下をゐふく
たゝみあげ、
湯のあさ、
しを一尺ゐ
ばかりぞ

ものかたちかゝりてかゝるものゐりの戸棚ハ世の居風爐

百廿七 山田の客舍 附間の山

十日ゐ山田妙見町小倉屋甚右衛門てゐ旅店ゐ宿る。この地の
友人佳木通称山原七左エ門來りていと深切ゐりてあるる。久老ぬ〳〵を訪
ゐ。信州遊歴の留守りてあるぞ。月仙老人ハ訪ふべくりしが。

追書
なけの郡い
神祇のみふ
あらだ、これ
いつまで考へ
たゝまゝて
あやまり
あり

これも海辺のいとゞうまゝゝゝ

○古市ふ〳〵容あるもの。家内のかやま残らず出く仕まつる者ら
ぶ。大うゝ十五六人廿人ばかりあり扨盃出く酒のうすゝまれば。
衆妓酒の相手ふるり。一人毎ふ客ふ盃をさゝその内二人三絃を
鳴らし衆妓同音ふうゝふその内まゝ客の目ふとゞまりし妓を
定むもの。その妓つとわきゝ客の傍ふ居る。衆妓を猶席ふなり
く身を添ふ。のうち追〳〵客あるもの妓五六人ゝのまゝくその客
とりけるもの。閨房ふ入るの時ふいろうて衆妓もしめく散ぞ。そ
もそでいぼりふまゝふ貪り食ふゝあるぶ。
○古市もいまい伊勢おんど大ふおゝろ〳〵。大坂ふ武ハ江戸の
めりやす潮来ぶし似く非ふるものをうゝふ佳木てふおゝふ
声ゝへふおんどそうゝひ妓せうゝ妓ハかつゝくゝわふおるぶ。
妓も〳〵せのようだの一トおどまとのふしゝとゝおんどあいなるぶ

音頭のゝぞ長〳〵その地ゝなるゆゑ〳〵それぞの俗のおいなるも
ぞ〳〵ぞおもふる。
○妓を京大坂より野鄙ふり。髪を髵（ビン）を髷（ツト）ゝもゝ〳〵。四方丸し。
圖を前ふ　嶋田の髷のうしろと髢（タボ）と引付〳〵あり。前髪を京風の
如くきり〳〵前へ出てる。衣服を絞り縮緬の単物。或を紹縮の
帷子。帯ハ蒲繻子ぬゞゝ繻子等あり。中々祇園嶋の内ふと
ふ及ばぬ。縄手坂町の妓ふ對をゞし。
○言語を京談ふ似ていせ訛りあり。
「やけもしいふを。世話ふいふ」ふふゝるふんし。「来たらを」「来たハ
んし。「下されとふ」ちやちやりつゝ者〳〵ふぶんゝたてふぶん。
あゞゝいふ。ぐんせとふぶつきゝ。せの字を言中（コヱバチ）ふふゝをいふ
ゆゑ。ぐんらふぶでし。ぐゝ京大坂いせの女子ハ茶を必ぞ

茶々とうさねくいつゝ結ひとあり。

○古市ふくゝ地並とうふを。一夕方金一顆あり。旅人ゑ廿四匁。是金壹分

貳朱はあくるの母ふ[illegible]紙とのふりのあり。則紙札あり。壹匁札六十四枚を以て

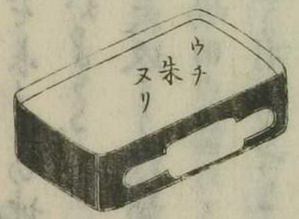
小判壹両ふ換ふゆゑふ六十四匁ふくゝ壹両あり。名古屋ハ[illegible]を米札とのふ。夜食を

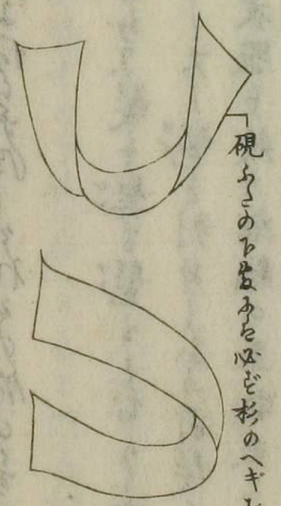
床ふ入りくゝ後夜半頃ふ出だを。菓子を坐付ふ出をあり。地並ハ席上

行燈ふくゝ燭臺ふしゝその外の食物等萬事畧せり

○古市。松坂。四日市。桑名すべて妓樓の硯ぶたつゝまも圖の

如しゝ。飯鉢の臺の長きゞ如し





硯ふこの下皮あを必ど杉のヘギをしゝ也

○初會の客も後朝ゆを了髪蒔繪の櫛箱をのち來り客ふ

呈を。文をのり入ふ櫻ふどいろぎりふ[illegible]たてふくゝあり。京

大坂とも妓の文を尋常の半切ふ[illegible]。伊勢ぞあり古風のうり

て堅文ふ[illegible]もそうゝ。扨客逗留をれば。了髪始終付をゆ居て

必樓上ふいざあふゝ。ゆゑぞ妓ゝづゝら迎ひふ來る。その

手段いとゆめやうあり。

○伊勢の妓樓ふくゝ[illegible]。第一古市。第二松坂。第三一身田(イシンデン)

第四四日市。第五津。第六神戸。第七桑名あり。この内桑名ハ少

しゝ[illegible]。桑名の美濃屋とうふ樓少しゝ趣あり。凡此七ヶ所の

妓つゝう交代を。年中その月よりそその地ふ盛衰あり。故ゑ

時々交代しゝ久しゝ一所ふ居ぞ。吉田をう崎又此内ニあり より〳〵此七ヶ所の

妓その趣ゝなお似うり。

(百九) 古市芝居の噂 附一身田及堤世古の噂

古市ハ芝居二軒あり。春と秋興行也。近年春一度興行也と
いへ。一身田も至極繁昌ある地まゝゝゝあれ芝居あり。八月初
旬大坂より片岡仁左エ門あどゝぐゝゝ芝居ありとゝゝ。
○古市の外山田ハ賤妓あり。夜をこのけ行燈をとり甚ざふ
ぢをへつり
○山田ふてい横町を世古(セコ)とゝのふ。今も大世古堤世古あどゝのふ名
目あり。
○津より山田まで九里の間。食物悉菜あり。宮川のあるゝ
堤世古の松坂屋三右エ門てふ酒店の料理也ゝゝゝ。ゆゑふ
店上客たゆるゝゝゝ。(松坂より雲出の川宮川かゝりある店多ゝ明星のゝゝゝゝゝ夏月ハ湯殿のゝゝゝゝゝ)

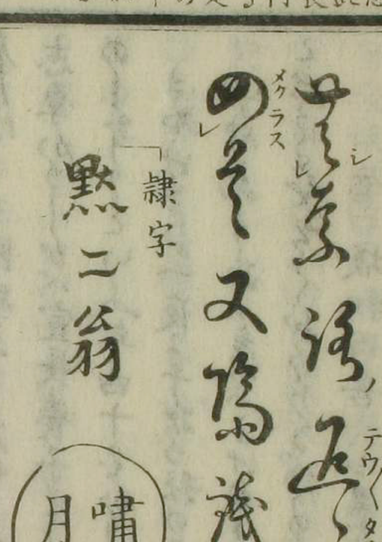
追書
この書後ふ古筆鑒定ふ佐川田昌俊ふ行ゝゝゝ龍安寺偏易和尚黙々ゝ

(百十) 大平ゞ噂

八月十二日松坂の大平を訪ふ。(通称ふ居ふこゝ名ゝゝ)この大平を元豆腐
屋なりゝゝゝゞ。國學ふこゝろをよせ。宣長翁の弟子とありてその
志厚かりゝゝゞバ。宣長養子とゝゝたり。宣長の跡とのふい此大平
のゝゝなりといふ。年四十ゞかりふゝゆ。至極人品ふ紀人あり
さやけき秋一夜ふ千秋の秋の月ひとふ秋の影やうゝる大平
如神花ゝ雨ゝ雪ふ雪ふゝけゝをゝ喜ゝる人の神ゝかゝゝん 大平
こゝゝゝをゝゝゝゝゝ

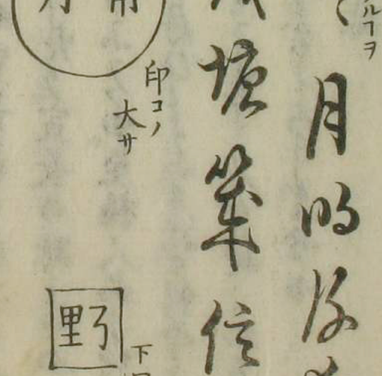
もとあり、京の大倉好齋の鑒定ふも、江戸の古筆隱居子意あり居子せ〜ふ皆右の如くよ云りと桂窓の話あり此書松坂人長井嘉左エ門の珍藏あるゞ、右の鑒定あて珍藏の疵よあり〜とのゝ又これ同人のそふふ〜あり、

たる三行のもの。



「隷字」

黙二翁



手迹を大師様の如くゝゆ。黙々翁を喜六ゞ表歸あり

百卅三　道のへ社權

追書
當時ハ平ゟま
だ殿村主人
と面識あら
ざり〜祈く

松坂の殿村三五平を。蕉門の杉風ゟ後あり。とのふ。こゝふもせ紙墨迹多〜。そ社内ふ

たるのへ社權をるふらゝをけり　もせ紙

件のうけのあり。諸集を道端と一直せ〜もちゝ道端と一直せ〜もちゝ。道のくを先按ふて後よ

又同人所藏のうけ物ふ。許六ゞ俳諧三聖の圖よもせ紙の賛あり。三聖ハ宗祇宗鑑守武前書長文ふてあり。以上長井元申話予歸路をいとゞ〜ゟ一見せゞ〜そやゝね。

追考。後よ吹〜ふ殿村氏ゟ杉風ゞ子孫よあらゞ。二三代已前の主人俳諧を好ゝ〜ゞ。もせ紙以下の墨跡を藏弆ゟれど。今をあらゞそゝゞ。かゝもゞ傳聞のあやまり知るゞ〜

百卅四　其角ゞ自画賛の評

長井元申所藏其角が自画賛なり。唐紙横りの

かゝのこゝ。發句を画へうけゝ書付たり。其角の名ハ薯子とのひしあゆ。按ずるふ薯ちのもなり。其角画を下手なれバ。そゞくのち

芋と卑下せしあるべし。今も下手をいもとのふことあり。元禄以前の洒落なるべし。

百廿四 伊勢の好事家 閃人物の評

勢州追分内日泉村ふ。岩清水亀六といふ人あり。こゝふ謝肇淛が唐紙一枚ゑ書し三行ゑ詩あるこゝ聞ぬるべ。帰路ゑ亀六を訪ふふ留守ゝゝゝ又えず。亀六ゑ頗好事なり。

○四日市ゑ伊達源三郎とのふ人あり。五拾の好事家あり。そハ弟馬曹ゑ詩作俳諧あゞ嗜めり。八月三日両子を訪ふふ馬曹ハ當春没し。伊達を訪ふふ〜ハのそゞ。

○津ゑ伊豫町八幡邊ゑ訪ふべき人あまたゝ〜ゞ。帰途の急ぐゝまゝふ訪ふゞ。凡遊歴の客の道をいそぐハ。槌を以〜箱を洗ふ如く。空し〜く手足を費し〜〜詮ふ記しゞ。

○三州吉田の濱名屋勘七ハ、ぐ〳〵扇亭と號す。所藏の扇面數千本あり。これを一覽するに一日ふ〳〵猶盡さず。

○伊勢ふ〳〵人物を。本居宜長。韓天壽。田必器。月仙。久老あり。此内久老ゝその名いまゞ發せぬ。宜長を伊勢のゝゝふ限らぬ實ふ大家なり。宜長當春物故ス

ちりぬるもゝ古人となりぬ今殘るゝ月仙と久老のゝと

百廿五 筆捨山

去る八日ふ大津より乘船して矢走ふ着きぬ。ちりぬるもむかしく船底ふ潛て居る。湖水を賞するふ〳〵。九日の朝鈴鹿山を過て坂の下ふ出る。山中ふ狩野古法眼が筆捨山とつふあり。山を高うらぬ石山まゝ小松生ぢげもり。武州金澤ふも狩野の筆捨松とつふあり。又紀州まも同名の松あり。ゆゝへも画家もいと拙

うるとしふやうつ〳〵かゝるとつふ山まもなつ〳〵。浪人山水ゝ名をまあげること

雅ふらぬぞうえも

ちりぬるもゝ山まもふ〳〵れるとつふ

百廿六 桑名の秋雨

八月十三日津をたちて。未明ふ上野へ過る

狂句 秋の雲厚を上ゆるゝ外ゝ

今夕桑名ふ泊る。まもけ丹羽若狭九右衛門 長成米屋佐介 ふどつふ人いと深切よりて。ふまこる。十四日雨ふり〳〵船出ざりゝれば逗留。遊歴中古書をたづぬるふ珍玉いたづ〳〵ふ〳〵いせ屋はの山形屋とつふ書肆ふ元禄已前の草紙類ふまこく〳〵あり〳〵ゆゝふりとあゝふりの地ふある二日も逗留せば珍書ゝ得つべきとつふ

一日ふ〳〵出立〳〵〳〵〳〵

神戸領。桑名領。町家川邊大水。田地悉變〳〵河原となりぬ。

百卅七 桑名の歌曲

桑名邊ふ〳〵大坂のめりやすをうたふ。あるもどる風調少〳〵異なり。又さ〳〵ものといふものあり。おもい歌淨瑠理ふり。此さ〳〵ものゝ。あるも亂。田ふ〳〵などふ章歌あり。

百卅八 桑名市中の喪

桑名にて喪ある家にて。軒にむしろをかける。江戸にて簾をかけるおとし。大店も莚二枚。小店も一枚なり。則暖簾をさげたる如くなり。土人の云。この〳〵 天武天皇行幸の時の遺風ふりと。

百卅九 一目連

桑名より三里ばかり西北ふ多度といふ所あり。多度大神宮たゝせたふふ。相殿ふ一目連といふ神おはします。宮殿ふ扉ふ〳〵

一目連ハ天目一箇命又天麻比止都命天津比古称の御子あり

翠簾のごとなり。神体ふ太刀一ふりと幣のごとものふ。この神甚奇瑞をこゝのちもつ。折々遊行ありふとなりとて。里人專ら信心ふ。多度大神宮ハ桑名より乾の方三里許にまあり。祭る神ふ天津比古称命ふ

百卅 佐屋廻り

十五日も雨ふる〳〵宮へ舟出ぞ。せびなく小舟ふ棹さゝせく佐屋へ廻る。

舟ふ乗ふ朝ふ出て佐屋宿　五番
伊勢ふ入ふ入ふ入ふ入ふ　五十
桑名の餅の赤くる秋空　五番
暮るゆびく舟のゆるせよ秋の雨　五十
扶やとゆせてくるまの春　五番

桑名の俳諧師ハ〳〵美濃風と称ふ。赤くもどる文考が

風調よもかのごとき。田舍の俳諧を頑ふく佛者の他宗をもまじへざる如し。この日架橋とふ人。船まく佐屋まで送まり。船中の吟。

たゝむ扶もひとりにて朦やうの月　架橋

やとりとりうけるとの茶乃露　ゆ春

○佐屋本陣呼望の短冊

宮ゆきの名のやとりつゝの名もさやへまきもあはのあるはなし

（百四十一）名古屋の十五夜

十五夜を名ふりぬ。十六夜名古屋に雨降まて。

名月や　蛍　ゆ

おやとるゆさに百里を踏来ひとり月見る草の露

（百四十二）藤川の夜行

八月十七日藤川より赤坂に出る。日ふまて草木の虫のさゝやと

宮衣橘洲ハ小島源之助と称し酔竹菴と号ス田安府の小十人なり

物のあはれ。月の出る頃あるいは空をながめて居るよりは。

かゝるにも月も花も雪ぞ恋しき　雪ぞ恋しき　澤海の銘ぞの歌

（百四十三）ますせ戎の巻白塚

藤川の駅西より入口南のうらに。今年新ますせ戎の巻白塚を立る。

ますもこの村ら記事ありきの　ますせ戎

東海道京まで七うち。驛の街頭ふますせ戎の発句塚なるへ。

興津のこなり。又杖つき坂　杖つき坂

（百四十四）ひらこうも

橋洲老人。七月十八日ふ多まるまり。名古屋まて送ぬ

ひらあるもまでうの川　松の葉をかゝ

（百四十五）かもうの

山城より伊勢遠江辺の冬瓜をうつちをとるのゝ〇かゝの如く丸きもあるもとゞまるなり。かまくら甚だ大なるべし。どうなもといふ名の箱根より西まもなし。さ東埔塞(カボチヤ)あり。味ひ尤淡薄なゝくらひがゝ。京まもいうばちやをゆで。青のりをふりかけて酒の口とりあるべし出だせ。ゆゝ〜ゆだるゝべし。

百四十六　濱松の夜雨

八月十八日濱松ふ宿せ。うみの夜雨いとくふりぬ。明日大井川越んとあるべつのあゝ。

ふり流をあるもの物を思ふ夜の雨　大井川ふりぬやまもるゝ

百四十七　東海道の噂

東海道小田原までい。人氣家造り等悉く江戸をまねぶ。刻なるべよりとうる店ハ江戸の如く障子ふたもよの糸を重ね。

箱根を越ゝ風俗少しくかはれども猶江戸ふちゝ。遠州路までハ女の髪の風も江戸をまねびぬ。言語も一風なりとのつゞも東國訛りあり。今切の渡しを隔ゝ三河路へ入もゝば大ふ一變せた。むもの看板ふど京地の如く〜〇たゞとかゆうの木札をさげ和〜。尾州ふいゝりて又一變せ。宮七里の海上を隔ゝ又復一変せ。大坂より西ハいまゞゝ。江戸より東北猶いうあらんゝ。

京より伊勢までの燧石(ヒウチイシ)ハその色大に黒し、水戸より出る石のごとく潔白あるりのさゝはあゝ京の婦女江戸の燧石をそもゝば大ふあゝ〜む、

百四十八　薩陀山

八月廿日興津ふ宿せ。せゝき嶌よりまゝ打邊まで一里の松原を過るふ。三保ゞ崎を右ふるゝゆゝ〜驛ふ入りぬ。

ゝ結のもりかゝもちめつら〜沖津鯛

同廿一日未明ふ薩陀山を越るふ雨少〜ゝりて風景ゝ損せゝ

明るたりてゆ〜雲のきれる方をみれば富士の裾半ばのら
まれ出るもうれし。彦のほとり夫婦とおぼ〜き順礼ぶも〜
とこどとつひあるら跡より来もり

御社の不二ゆらきつた岩の神主婦宮籠のあ〜いまり小木

百九十九　大井川

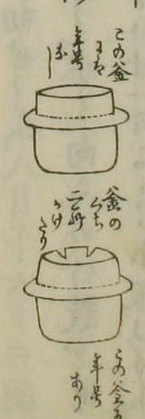
去ぬる十九日の夕ゆる大井川を越たり〜ふ十五日の雨ふ川ゆ
らくつゆ〜きのふ十八日ゆ渡〜もどめゆるとつふ。この日も折々
雨ふりけまば水高〜流まけもし〜。川ごゝの乳のあらうまでひさ
〜ぬ。過〜五月廿二日ゆらけ川を越ゆり〜日もかゝのことゝあるふ
川ごゝひとりに九十四文のてゆあり。連臺てふ名ものりかつぐ
まるぐらゆるふ。めつゆめ紀〜いとゝろゆる〜かり幾
大井川これを地獄のきりひめも涙をなゝだの蓮臺ゆらば

百卒　喜瀬川の大水

去ル十五日雨つゆ〜ふりゆ〜。次の朝五ッ半頃駿豆の堺ある喜瀬
川の橋ふぐまたり。この橋ハ過〜六月廿九日の大水ゆなぐま。七
月十八日ふもどめて仮橋のゆゆり初せ〜ふ。八月十六日の朝
水俄ふ漲り出ゆ〜この仮橋をかゝ〜流〜。水も向ふの竹數をも
らへりと茶店の老翁りもぐゆり。予ハ廿一日ゆゆふ来ぬるふ。
川幅ゆづゝ廿間ゆ足らぬ川を連臺ふゆ〜ぬ。かゝるあゆい
ゆめづ〜きとあり。三嶋の東新町川の橋箱根三枚橋その
外ゆ同時ふ落ゆ〜五七日百姓ゆたゝ〜ゆり。悉く連臺ゆ〜ゆ
ゆ。十五日ゆ予来名ゆり〜ゆ。桑名名古屋の間川々を何の
きゆりあゆ〜越ゆり。ゆづゝ四五十里を隔ゆ天地風雨の變
化かゝ〜ゆごゆ〜

百五十一　箱根東福寺の釜

八月廿二日もとね山を越ゆ。こゝより日三嶋をたちて大磯ゝ至る。山路をかけ〳〵十二里の道なり。箱根權現へ詣んと道よりうけぬけたるゝ。社まぢかい程遠〳〵。供の人足りねく〳〵もんこの心うけもべ。二の鳥居より遥拜も。一の鳥居の左りゝ方ゝ釜二ッあり。文永五年ゝ造る所ゝ〳〵東福寺浴室の釜あり。別當法橋位隆實とかり。一ッの釜まん年號ゝ〳〵。銘も釜のふちゝ鑄付たり。



もたゞ〳〵紀まゝふうつ〳〵來らぬ。

百五十二　さゝ波河原の懷舊

さんの河原ゝ〳〵

もゝひきやまもさんの川ゝ助もの〳〵もゝ紀のさらゝ水うみ心のゝこゝりぬゝものを。さんの河原五體の地藏堂あり。ゝ波かゝ〳〵ふもゝりもむもめ。せいゝ。又三歳ゝ〳〵世を早ゝ〳〵せられし兄吉次郎荒之助の事ゝど何ゝ〳〵思ひ出らるゝ。ゝ〳〵たゞもゝ初ゝべ。ゝ〳〵ゝ〳〵來りゝ。權現ゝ案内申さんゝ〳〵たゞゝといゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵。錢五六文ゝ〳〵ゝ〳〵。むらゝ〳〵ひろひゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

嶺姑峯一山
平越眺望之
不二山真景
八合目ばかりと
つりもろ
ばかりあり
ぜんぶ
不二の
風穴ハ
まもろ

山霽晴如
拭
引人且駐
節
秋天一
碧
洗出白芙
蓉
坦庵老人

志のり。山上ふ旭日決ゝく高興言外。暫時行客の足をとゞめたり

百五十四 名馬の足跡 此条兩詩ふ出たるゝ省く

百五十五 大磯の戯咲歌

五月十日大磯ふ宿せり。八月廿二日歸路ふいたりて又あくり宿せ

大磯や庵が面ふる汐まくら　汐ふ紛ふ人ゝ

百五十六 遊行忌の羣集

八月廿三日大磯をたちて河崎ふ泊る。今日藤澤遊行寺開山忌ふ〳〵。遠近の村夫村婦參詣おびたゞ〳〵。寺内ふ角力ありしいひしが。昼より雨ふり出しるもゞ。參詣の老若ふ濡ぬもあゞ〳〵家ふかへる

ぬれ衣やこゝ迄ゆゝしきたちゆゝ柳

百五十七 歸庵の祝章

廿三日川崎ふ旅寢せるふ。家路もまでふ遠ゝらねば。さもがふ秋の夜のあゝるとまちてびゝり

さゝ〳〵ほや江戸ゝ隣ゝ秋一夜

ねるもまで廿四日。ようゝ江戸ふ入りぬ。家居もでふちゝばるば。四たり秋子ともら袖ふとり つゝ門ふもゝを出ゝよろこびなゝゝもらやこの秋。

風も秋のまもりけるあゝくゝ四季ゝ江戸ふ入りて秋ふあてる秋

右五月九日江戸ふ立ゝ。八月廿四日江戸ふ帰る。日數百有五日遊歷の國。武藏。相摸。伊豆。駿河。遠江。三河。尾張。伊勢。近江。山城。河内。

攝津。都合十二ヶ國也

享和二壬戌年八月廿四日筆同十一月朔日校合畢

曲亭　瀧澤解戲記

附録

一旅まくあるくむべきもの

○貪りくいのくふと云らぬ舟人

○むとり旅とはきくいけきだむ宿引

○名所を過る日は風雨

一旅ふくろくろうべきもの

○錢をおしまてくいのら川をとまる

川越の賃錢は三文料とつとも、はい病者の薬礼とおるべきもの、病急て薬代をつくのふい、安き亟のまくの人数の常あるとど余を全世しとおりつばを拭も何かむべき、川越の賃も又うはどとし、只余と清りぐ、ちん錢とおりひくべ、むとあるべし、ちくろもまるれこ校ず

まくあるろ十六文の錢を惜くて、ある武家の借屋恒忠余とうあひ
るまくまくれ山中の人くまろうこ八月十八九のあ行ち

○川留ふ退屈して容ま留川を越まべうらば

○近くちをまかりて猥ま船ふ乗るべうらば

くまくい陸地ふくは来ふるべきと、然ふまひ海上のちうをもまま雑
所ふあふくい食こ多ふ人は、あり旅中むもはしむきなり

○連なる旅ち夜をおのして早く出立べくしば

彩の早くいくタいまあくとまくべ、彩るまいあまくまれゆくとあり、
彩はくいまりは旅なり

○水をのむべくらば。菌ちべくは珍らき食物を食らべくしば

○旅中を悉く敵地とこころく少しも油断をべうらば

ありてふ雷丸をませくいうちい事和ちべ、おちもべくいの物をまあやふ
くくいらべ祐えくまはあくべくいふまもむくふめくりをうべうはもず一
急慢をまはず米二麻毒のあまきあり、急慢をまぶれば海用ふどうせまう
ありつくむべ

○あくき草鞋をまやくぬきうあまべ

くくくいは價をおくまぶ、ぶんよりまくうはをまくべくまる鞋は旅人の甲
冒也くくくはあくく足つあめべはる一ちもまくびくく

○昼の食事を一二杯ばかり食ひ。空腹まなくべいくなるも少しづつ食ふべし。大食をもちゐば道をゆきうたし。

○小休の時。オンアトミソハカ〳〵と三べんづゝ唱へ〳〵その席をたつべし。かくもれば物をもちゐれば

ちうもどる宿間屋こゝ食人足い者をうたぐくをけ出をふあくをドとこゝろあいてはうをとれいをのオンアトミソハカきへいをもるくをものあり予も百日の旅中ふきをもるこれを拭一ぢぢ五一ぐのをうゝをひぬ居いひをもちら早ゝうんとをおりをもべををあくをうをもべおのづゝをもや

二本を拭一ぢぢ五一ぐのをうゝをひぬ居いひをもちら早ゝうんとをおりをもべををあくをうをもべおのづゝをもや

○夏の旅を馬に乗べくゝば

なの馬を蠅はらくむあるおのづゝあちゝ、旅人も必睡眠をもうふをもものあり、旅ふなるふのをべ流る人まゝ

○草卧ゝ馬に乗るい大なる損あり。馬も駕をを朝のうち乗べし。朝を價も安し。昼より後泊りの驛程ちりけをべ。足のもとびもおのづゝからをもゝどゝくをもむもちあり。ちうをども紙のうち足をやをををををべ。草卧格別ふくゝよくゝ日をめ

用ふををををを。出立より五六日めふくゝもゝどめくゝあゝめをををるをををゝ。馬はつめくゝ旅をべ疝氣を生ぜゝれ旅馬と異しくゝ鞍上ふ穩ゝあをゝ

この記世ふもちふるべきもちあ紀ふゝもゝあくゝねべひめくゝ窓外ふをををとゝ好ゝ。をゝと近曾書肆何ゞゝゞ強く請ようくゝ。

うの内數條を校萃ゝて三冊とゝ。簑笠雨談と名ばをて刊行をを。己下ををは人のをる事と許をを。後もまをかゝてなるべゝ。

をゞ子ども等。板せんと乞ふとのありとも許をををあゝれ。

正幹曰。こゝをが翁の遊歷の道をがら、かりそめふ物せちををる筆記ふくゝ。のゝとゝより鷄肋のやうなを紀をゞひあれど。

そゞ中ふを。當時風俗の美惡。人物を批評ふと。何らをとふ

くかいつけををべ。世ふ悼をふとゝりとて。板行とべ許をを

ざをゝ。翁の用心もまたをふともむべし。ちういあをど。物換

り時移り。文明の御代あ〜あまべ今さと悼るべきあとふ
いからざるべし。かくく文字を校訂し。世まる示さだやと
思ふ折〜る。書肆畏三堂ぬあるゝ。らと梓ませんと乞ふま
ずるゝせ。やとゞく三巻の冊子とゝあ〜ぬ。さまべとて。かくも
うあき筆のもさひを。世るこめ〜うせんとにいあらぞ。
たゞ予ゞ姻族のこのふこのち。翁を慕ふる人ゐも見せん
らぬ。心〜らひよりせ〜あとあまべ。翁の素志またゞへり
あど。世の誚を得るあこのるも。そい いまゝか辞せざるとと
ろなり。

羇旅漫録巻の下終

男子ゑよ去こを未見ぬ書籍を閲ん
こをゐもひ。旅ゆ〜あるくい未ん山川
よ遊んとるゐ。志のゞも為なゞらな
きとかゝ。寛政庚申。弟三十四巣。
九月中浣。豆相の間を遊歴す。九月十日発江戸
先づ武州金澤を遊覧し。浦賀の友
を訪ふ。豆州下田を渉る。相模灘三十
餘里。百難風よあゝて船押りこのる。
九月下旬よいゝ〜下田ぬ港よ遊ふこと

十日許帰路浜連屋より沼津へ渡し。天
城六里の山中を越え。天城山六里間無人家 沼津番所より
統森し。三嶋沼津の友人を訪ふ。相
模屋宋よりいろう。杖を給ひ鎌倉へ戻
る。神奈十五日家へ帰る。洋宋百余里。
始終猶りを。楽しみきてあれを生
苦しめ。出発時於まへらく。七年ぶる
よりあふる。旅行ぬてびはのかぎ
しと。赤のうく花ふてび帰り遊てぶ。

文事より百日時あれを仕るの上一年
時間あり。すし命と時ふてふつなぎら
ひなど。かきてもく出時御なもべし。
古人言あり。こと有深と。

人生宇宙間。志願當何如。不行
萬里路。即讀萬卷書。

享和二年壬戌冬十二月二日

著化堂馬琴再識

聞三堂本